

天童寺に拝登して

清水 芳俊

我々訪中団一行は、蒸し暑い日本を離れて、中国大陸の表玄関である上海空港に着いた。

一路、ホテルへ向かうバスの中。真夏の太陽を浴びた、世界最大の都・上海の市街が見え始める。汚れた古い建物、道路いっばいに広がる人と自転車の波、地味な様で生きているこの街の人たち。「これが中国なのか？」と、余りの汚さ・喧騒さに私の目を疑う錯覚さえ抱いた。これが訪中の第一印象であった。

一行を迎えてくれた静寂な森の中にある華美な絨毯を敷きつめた飯店（ホテル）、昼間の印象との対比、とても信じられない感性に浸った。

人間はおかしなもので、いろいろな未知の国へ旅をするとかわが、一日一日すぎてゆくうちに鼻眼が次第に慣れてくる。この国へ来ても、隠されたしっとりとした中国の味がだんだんとわかり、建物の汚れた染みが静かな陰影に映り、この国で働き生きる人々の姿が確かな人間として見え、何か吸い込まれそうな奥の深

天童寺に拝登して（清水）

さに魅せられた。

散遊の中で出会った中国の一端。縁台の上に裸で昼寝をする人・西瓜を喰いながら歩く男女・重そうな煉瓦をリヤカー一杯に積んで働く老人・淀んだ川を道がわりに舟で物を運ぶ人・薄暗い家の中で豆の皮を剥く親子・黒ずんだスープをおいしそうに飲む若者・青空下の公衆便所で話し合いながら用便をする人々・汚れた川の中で髪を洗う婦人などなどの姿。その呵責のないこの国の生活、日本人のような贅沢はなく、曙光を待つ人間の原点があるようだ。中国は大へん蓮華が多い、その淤泥に泛ぶ蓮華の如く根強く生きている姿には、理屈のない大陸の大らかさを感じざるをえない。

こんな人々の姿を見て、たとえ一ときでも哀れに感じるのは、小国に生きる窮屈な日本人の感情であろうか。彼らの生きる世界では、私を感じるほど哀れさは無いに違いない。この国は、生きるためには余りにも人間が多く、貧に甘えている余裕はない。そ

天童寺に拝登して（清水）

れが生まれ死するまで普通のことであり、何とも思わない国民かもしれない。

そんな想いを心に刻みながら、今回の訪中の目的である天童寺参拝の日を迎えた。

緑濃い山を越え、竹径を深く入ってゆく。至上の瞬間、こんな山中にあるにもかかわらず、雄大で壮麗な寺院が天童寺だ。この寺の伽藍・仏像・聯に書かれた美しい文字の連続、書物の上でしかわからなかった私の想像とは、随分と違っていた。あの七〇〇年前、この地で、道元禅師が如浄禅師に邂逅した時の感動とはかなりの変容があるのではなからうか。人間は他人が成しとげた結果から出発することは出来ない、と先人は云っているが、人間が生きる歴史の中でこんなに隔世の感があるとは知らなかった。朝の勤行に参加し、その凝視の中でも然り、扇子で身体をおおぎ靴下あるいは跣で読経する、日本の僧堂では「威儀即仏法」といった規範の法式があるが、この寺の修行僧の姿は、それを乗りこえた放埒な様をかもした。しかし、その合掌・お拝の形相には、修行する自己の中に菩薩が生きている、これを大切に行をし仏道を求める真摯な僧の実存が見られた。これは、国民性あるいは環境の志向する相違であらう。

種々のこうしたこの国で生きる人々の生き様を見るに、浮動する政治・経済の変動の下で脈うつ雄大な中国の歴史が、未来に向ってどのように変化され止揚されるのか興味深いことである。

この短かい旅の中でのさまざまな中国観は、出発前の私の感性をこなごなに打ちくだいた。天童の石一つだけを大切に心の記念としてひろってきた。

また機会があれば、中国という国へ出かけて甘えた日本人としての自己を沈潜させてみたい。中国とはそんな国であった。